

近世音資料における果摂一等の表記

中村雅之

1. はじめに

従来の元代音研究では、楊(1981)に代表されるように、果摂の韻母を開口[-o]、合口[-uo]のような円唇の主母音を有するものと推定するのが一般的であった。これに対して、吉池(2005)では、『至元訳語』の音訳漢字における用法を検討した長田(1953)の論によりつつ、果摂一等開口に非円唇の[-ɤ]を推定した。論拠は、『至元訳語』において、モンゴル語の/gä/を表すのに「哥」が用いられ、/kä/を表すのに「可」が用いられることである。モンゴル語の/ä/は[e]~[ə]の範囲内にあると考えられるから、「哥」「可」の韻母を通説のように円唇母音とすれば、かなり奇妙な対応になってしまう。むしろ現代北京音同様に非円唇の[-ɤ]を推定する方が落ち着きが良い。吉池氏はこれに伴って『蒙古字韻』等におけるパスパ文字表記で、「哥」などを「-o」で表記していることについても、漢語音[-ɤ]を表すために他に適当な字母がなかったための措置であると見なした。

吉池氏の論は二つの点で重要である。一つは、楊(1981)がパスパ文字の表記「-o」に基づいて、「哥」「可」などの韻母を[-o]としたのに対して、逆にパスパ文字の「-o」が漢語の[-ɤ]に対する表記である可能性を示したこと。これによって元代の北方音で果摂開口が非円唇の[-ɤ]であったと推定する障害が取り除かれたことになる。もう一つは、元代の『至元訳語』と明初の『華夷訳語(甲種)』(および『元朝秘史』)が、ともに音訳漢字でモンゴル語を表記した資料でありながら、基礎方言が異なる可能性を示したことである。つまり果摂一等の表記が、個々の資料の基礎方言を峻別する指標の一つとなりうるわけである。

本稿では、吉池説を出発点として、近世音資料における果摂一等の表記について検討することにしたい。

2. 『至元訳語』と『華夷訳語(甲種)』『元朝秘史』

まず、議論の出発点である、『至元訳語』と『華夷訳語(甲種)』『元朝秘史』から確認したい。ともに音訳漢字によってモンゴル語音を表記したこの二類の資料において、果摂一等字はそれぞれ異なるモンゴル語音に対応している。吉池(2005)によれば、おおむね以下の通りである。(いま果摂一等だけを問題にしているので、関連しない部分は省略した。)

中期モンゴル語	至元訳語	華夷訳語・元朝秘史
/gä/	「哥・箇」(開口)	「格」
/kä/	「可」(開口)	「客」
/gö/	「菓」(合口)	「歌・哥」(開口)、「戈・果」(合口)
/kō/	「課」(合口)	「可」(開口)

すなわち、果摂一等開口(「哥」「可」など)を[-o]とする通説は、明初の『華夷訳語(甲種)』および『元朝秘史』については、その音訳漢字の状況と合致すると言えるが、一方、『至元訳語』においては合わない。『至元訳語』の音訳法は、元代の他の資料にも多く見られる一般的なものであるから、明初に至って、音訳法に意図的な改変があったという

ことになる。元代には「哥」「可」がモンゴル語/-ä/を表すのに適当だと考えられていたが、明初には/-ö/を表すのにふさわしいと考えられたということである。ただし、これを漢語の音韻変化として捉えるのは妥当ではない。むしろ北京と南京の方言差であり、具体的には、果摂一等開口の韻母は北京 [-ɤ]、南京 [-o] であったと考える方が無理はない。このことは単に、元代には北京に都があり、明初には南京に都が置かれたという状況からだけではなく、後の時代の対音資料からも窺えるところである。

3. エドキンス (Edkins) の記述

『至元訳語』と『華夷訳語(甲種)』の差異などから導き出される果摂一等の北京音と南京音の方言差は、基本的には現代でも変わっていない。すなわち、北京 [-ɤ]、南京 [-o] である。しかも南京音が開口合口を問わず [-o] となる点も、明初の音訳漢字の状況と符合する。とすれば、このような状況が元代以降、現在まで一貫したものであったという可能性が考えられる。以下には、明清時期のいくつかの資料でそれを跡づけることにする。

まず、19世紀半ばのエドキンスの記述から見てみる。エドキンスは明末以降の宣教師の伝統に従って、原則として(広義の)南京官話を記述しながらも、(狭義の)南京音や北方音についても詳しい説明を加えている。

Edkins (1857) では果摂一等開口は「-o」で表記される。その音価については巻頭の凡例で、イタリア語における発音であるとし、英語の「foal」における母音であると記しているから、要するに円唇母音ということであろう。一方、49頁には、「-o」は黄河以北の多くの地域では「ü」と発音されると言い、その音価は英語の「how / cow」の二重母音の最初の母音のようであると記す。「ü」については5頁に「ü as u in *but* pronounced long」とある。19世紀の英語音による説明から意図した音声を引き出すのは容易ではないが、非円唇母音であることは確認できよう。つまり、現在と同様に北方では [-ɤ] であったと考えて矛盾がない。

また、Edkins (1857: 64頁) は、「火」「貨」などが「ho」と発音されるべきであるのに、北京では「hwo」と発音されると記している。つまり、南京では現在と同様に、果摂の開口と合口を区別せずに「-o」と発音していたということになる。なお、Edkins (1857) においては、「h」の後では開合は区別されないが、「k / k'」の後では区別されている。これは南京音以外の官話音をも考慮した宣教師たちの伝統に従ったものであろう。

4. 清代の満洲文字資料

『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙』に代表される18世紀の満洲文字漢語資料は、一律に北方音的特徴を示す。すなわち、果摂開口「-e」, 合口「-o」であり、開口と合口を明瞭に区別し、かつ開口は非円唇母音である。

一方、17世紀末の『清書千字文』では、果摂は開口合口ともに「-o」で区別されない。この資料は尖団を明瞭に区別すること、編者が南方人であることから、南京音を表したものと考えられる。

5. 『西儒耳目資』

明末のローマ字資料である『西儒耳目資』は、かつては北方音を表すと考えられたこと

もあったが、最近では南京官話を反映する資料という説が有力である。しかし、厳密に言えば、狭義の南京音に拠っているわけではない。果摂の韻母は開口「-o」、合口「-o/-uo」である。「過」「火」など合口字に二種類の韻母が記されているのは、単一の方言に拠っているのではないことを示している。つまり、開合ともに[-o]である南京音と、合口を[-uo]で区別する他の官話音の双方を組み込んだものと思われる。これは本書が「晋絳韓雲詮訂」と明記されていることにも適合する。

6. ハングル資料

16世紀初の『翻訳老乞大』『翻訳朴通事』のハングル表記では、果摂開口は左側音・右側音ともに「-e」、合口は左側音「-ue」、右側音「-o」である。中期朝鮮語の「e」が[ə]と考えられていること、そして朝鮮資料が地理的な条件から北方音を反映するのが自然であることから見て、開口「e」は非円唇母音を表していると見なすことができる。

かつてはハングル「e」が漢語の[ɔ]を表していると、とりわけ韓国において、考えられたこともあるが、それは漢語近世音の果摂が円唇母音だという前提に基づいたものであり、有効な根拠はない。近世音全体の資料群の中で位置づけるならば、やはり果摂開口のハングル「e」は、北方音の[ɤ]を反映するものと考えるのが穏当である。

7. まとめ

以上、明清の主な資料について、果摂の韻母を検討した。北方音の資料は、元代の『至元訳語』、明代中期の『翻訳老乞大』『翻訳朴通事』、清代中期の『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙』などの満洲文字資料であり、南京音（ないし広義の南京官話）の資料は明初の『華夷訳語（甲種）』『元朝秘史』、明末の『西儒耳目資』、清初の『清書千字文』、清末のEdkinsの会話教科書などである。

明清の資料を、北京音（ないし北方音）を反映するものと南京音（ないし広義の南京官話）を反映するものに分ける指標としては、今回扱った果摂の韻母のほか、入声韻の音形、牙喉音の舌面音化および尖団の区別などがある。しかし、入声韻の音形に関しては、南京の音形が北方にもかなり入り込んでいるため、扱いは簡単ではない。例えば、「学」を「hiau」と記したものは、北方音と見て問題ないが、「hio」と記したものは南京音[hioʔ]であるのか、南京音が北方に流入した[hio]なのか峻別は困難である。また、北方における牙喉音の舌面音化などは17世紀以降の問題になるので、明代の資料には適用できない。したがって、果摂開口の韻母が円唇か非円唇か、これが資料の南北を論じるのに最も安定した指標であると言えるのである。

なお、今回は大勢を示すことが目的であるため、主要な資料のみを扱った。実際には、明らかに北方音の資料であるにも関わらず、果摂開口「-o」と記すものも若干ある。例えば、清末に北京語を記述したことで有名なウェイド（Wade）の初期の著作や、清初の満文老檔などである。これらの例外については、先行資料の表記法の無意識的な受容という面から説明が可能であると考えられるが、今はその可能性を指摘するに留めておく。

最後に、上にみた果摂における南北の差異を念頭に置いて、もう一度吉池氏の仮説に戻ることにする。すなわち、パスパ文字の「-o」が漢語の[-ɤ]を表したのではないかという仮説である。パスパ文字表記による漢語が、入声韻の音形（「学hīaw」など）から見て、

北方音に拠っていることは明らかであるから、果摂の韻母も当然北方音でなければならない。したがって、果摂開口の韻母に与えられたパスパ文字「-o」も、表そうとしている漢語音が[-ɤ]であると考えすることは十分に妥当な見解と言うべきであろう。声母の体系（範疇としての濁音を有する体系）などにおいて、伝統的な体系を保ってはいるが、以上のような検討を経た後では、パスパ文字漢語資料は基本的には13世紀北方音を反映する資料と見なしてよいということになる。

<参考文献>

長田夏樹（1953）「元代の中・蒙対訳語彙「至元訳語」」（『長田夏樹論述集（上）』ナカニシヤ出版、2000、所収）

楊耐思（1981）『中原音韻研究』（中国社会科学出版社）

吉池孝一（2005）「哥葛などの元代音について」（『KOTONOHA』36号）

Edkins(1857), *A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin dialect*, Shanghai.